



社会福祉ニュース 2013/3/31

Contents

巻頭言	p.1
2012 年度後期 活動紹介	p.2
新着図書	p.6
2012 年度後期 活動報告	p.7

《巻頭言》

スウェーデンの労働者教育と福祉—ABF（労働者教育連盟）100 周年に寄せて

太田 美幸（立教大学文学部准教授・社会福祉研究所所員）

2012 年 6 月、スウェーデンの首都ストックホルムで開催された ABF（Arbetarnas Bildningsförbund：労働者教育連盟）の 100 周年を祝うイベントに参加してきた。100 年間の歴史を物語る多様な資料が公開されるとともに、幅広い社会問題を扱うセミナーが市内各所で一週間にわたって開講された。スウェーデン国内はもとより世界中から集まった関係者と交流することができ、とても充実した一週間を過ごした。

労働運動が強いことで知られるスウェーデンは、世界に先駆けて有給教育休暇や公立成人学校などの成人教育制度を確立したことで国際的な注目を浴びてきた。そのスウェーデン社会にとって、ABF は特別な存在である。1912 年に ABF が設立されたことを契機に今日まで続く成人教育組織が次々と誕生し、それらを礎として現在の成人教育制度がつけられたからだ。

ABF は、社会民主党、労働組合中央組織（LO）、消費者協同組合やいくつかの産業別労組などを構成員として設立された学習協会で、これらの団体がおこなう労働者教育のうち、図書館活動と講義・講演会活動を促進する役割を担うとともに、小集団で読書と議論をおこなう学習サークルを労働者教育の主要な形態として根付かせることに貢献した。

学習サークルは、厳しい生活課題と格闘する労働者が、人類の多様な経験を集約した書物を通じて教養の幅を広げ、自ら問題を解決する能力を育成することを志向して構想されたものだ。やがて保守党や農民団体も同様の学習協会を立ち上げ、学習サークルを中心とする学習活動のネットワークが全国に張り巡らされるに至った。現在は ABF をはじめとする 10 の学習協会が毎年約 200 万人の参加者を集めており、成人人口の 75% が学習サークルへの参加経験をもつという。あまり知られていないことだが、1960 年代までのスウェーデンの政治家の多くは、高等教育機関ではなく学習サークルなどの場で政治的な知識を得てきた。スウェーデンの福祉国家建設は、こうした学習活動によって下支えされてきたともいえる。

さて、1912 年は、スウェーデンのセツルメント運動を牽引したビルカゴーデン（Birkagården）が設立された年でもある。ビルカゴーデンも 2012 年 10 月にストックホルムで 100 周年記念イベントを開催したが、残念ながらこちらへの参加はかなわなかった。20 世紀初頭から保育事業や労働者教育に取り組み、地域福祉の発展に貢献してきたビルカゴーデンは、スウェーデン福祉社会のパイオニアとも言われる存在だ。ABF やビルカゴーデンのような民間組織の 100 年にわたる活動が、スウェーデン福祉社会の基礎をつくり人々の自己実現を助けてきたという事実は、あまり注目されてはいないが示唆に富んでいる。今後の日本社会のありかたをめぐって草の根の社会運動が生起しつつある現在、こうしたスウェーデンの歴史から学べることは多い。スウェーデン社会を研究する者として、できるだけ多くの成果を発信していかなばと思う。

《2012 年度後期 活動紹介》

① 公開講演会 第 36 回社会福祉のフロンティア報告

デンマークモデルから得られる日本のグローバル福祉国家の着想

前田有香（立教大学文学研究科博士課程前期課程）

2012 年 12 月 21 日に開催された第 36 回社会福祉のフロンティアは、本学経済学部菅沼隆先生による「グローバル化に向き合うデンマーク福祉国家と労働組合」で、昨年の研究休暇をデンマークで過ごされたご報告でした。ご講演の目的は、デンマークの労使関係を基に、「グローバル福祉国家」の条件、フレキシキュリティ戦略とモビケーション戦略着想の基盤、グローバル化と労使の対応におけるデンマークの構造について詳細に説明することにあります。結論として、デンマークと日本の労働社会の構造の違いを見極めた上で、今後の日本がグローバル福祉国家へと転向した場合にどのような着想が得られるのかという点について示唆されました。

菅沼先生によれば、デンマーク・フレキシキュリティの一般概念は、「労働市場の柔軟性」「寛大な失業手当」「積極的労働市場政策」の三項で成り立ちます。フレキシキュリティとは、福祉国家における労働の市場化戦略の一環であり、「柔軟性（フレキシビリティ）」と「安全性（セキュリティ）」を同時に意味する造語です。こうした戦略におけるデンマークモデルの特徴は、労使ともに強固な組織に基づく横断的労働市場、中央集権的な団体交渉による合意、対立の少なさ、ボランタリーな制度にあります。つまり、コーポラティズム的な福祉国家政策がデンマーク・フレキシキュリティを支えているのです。最近のデンマーク情勢は、金融危機の影響を受けて経済的な状況は厳しく、労働組合の組織率はやや低下しているものの、全国組織の職業別組合と失業保険によって高い組織率が維持されており、職業訓練プログラムの充実と解雇のルール化による労働市場の高い流動性がデンマークの社会民主主義・福祉国家を支えています。

また、グローバル化への対応として労働市場改革が行われる中、労働組合は教育機会の重要性を主張し、モビケーションが提唱されるようになりました。モビケーションも、「(労働人口の)流動性（モビリティ）」と「教育（エデュケーション）」を組み合わせた造語です。デンマークのような小国では労働市場の柔軟性と人的資源の向上のために、生涯訓練社会の実現が欠かせず、モビケーションは今後目指すべき戦略概念となります。菅沼先生は、今後の日本への示唆として、生涯訓練社会における国家戦略を作ることが可能かどうかという点が最も重要であると述べられました。

私には、戦略概念であるモビケーションが、今後の日本の労働社会にとって特に興味深いと感じました。モビケーションは、全ての人々が常に勉強・移動し、新しい仕事を求めていく社会を想定しています。グローバル化に対してデンマークが福祉を維持していくためには、生涯訓練社会を軸とした教育訓練が重要であると考えられ、この概念が注目されるようになったのです。日本も同様にグローバル化社会の中では、変動が著しい社会に対応できる人的資質の向上が求められ、今後生涯訓練社会を意識する必要があると考えられます。このモビケーションを実現するために概念をそのまま模倣することは、訓練プログラムや制度の構造上の違いから極めて困難であることが理解出来ましたが、本講演の内容から着想を得た結果、具体的にどのような制度をとればそうした理念が実現するのか、今後の展開にとっても関心を頂きました。私の研究テーマである障がい者の就労支援において、当事者を対象とした離職後の再就職の手立てが十分ではなく社会復帰が困難という現状があります。モビケーションの実現によってこうした状況の改善にも繋がるのではないかと期待します。

本講演は、各国から評価されるデンマークモデルの基盤が詳細に説明され、デンマークとの違いから着想を得ることによって、多くの参加者に今後のグローバル福祉国家としての日本の取り組みを検討することの重要性を示す機会となりました。

② 家族コミュニケーションセミナー報告

家族コミュニケーションセミナーに参加して

佐伯香澄（国際医療福祉大学大学院）

私は 2012 年度の第 1 回・第 2 回家族コミュニケーションセミナーに参加しました。私が参加した回では、家族イメージ法やジェノグラムの作成、また、ロールプレイを交えながらの超軽量粘土法や家族造形法を取り上げ、自分の家族について改めて振り返り、家族を対象にした支援について考える機会となりました。

私が特に家族の関係について考え、興味深く感じたのは、家族イメージ法について取り上げ、実際に自分の家族の関係性について振り返った時でした。私は普段、家族の関係性について意識する機会が少なく、意識したとしても、自分と母親といった一対一の関係にのみ注目することが多かったです。そのため、家族の関係を図に表すことは難しく感じ、自分と家族ではなく、家族と家族の関係について改めて考えてみると、どのような関係にあるのか分からない場合もありました。しかし、作成の過程で悩みながらも自分の家族を振り返り、完成した図から自分の家族を全体的に見ることができたように思います。それに加え、家族と家族の関係が分からないと思ったことから、「この二人はお互いについてどう考えているのか」ということについて考え、家族の関係を顧みる切っ掛けとなりました。

また、第 2 回目のセミナーで家族イメージ法を行った際、第 1 回目とは違い、ペットを含めた家族イメージ図を作成しましたが、その家族イメージ図が第 1 回目のセミナーで作成したペットを含めなかった家族イメージ図と大きく異なっていることに驚きました。家族イメージ図に表す家族メンバーを増やしたことにより、それまでの距離間や影響力の強さか変化し、新しい家族の「形」となっていました。それまで、家族の関係は常に一定ではないと理解はしていましたが、第 1 回目と第 2 回目で作成したそれぞれの家族イメージ図を比較してみたことにより、理解するだけでなく、状況に応じて関係が変化すると実感することができました。

家族コミュニケーションセミナーにて家族について改めて考えたことにより、様々な気づきがありました。その中の 1 つが、私が自分の家族について考える時、家族が身近すぎて主観的・一方的な見方をしてしまいがちであったということです。こうした見方による家族間でのすれ違いは、今回の家族コミュニケーションセミナーで取り上げた家族イメージ法などの技法を用いて改めて家族について考えてみることで、新たな見方に気付くことで改善していけるのではないかと思います。今回の経験を家族に対する支援に活かしていきたいと考えています。

家族コミュニケーションセミナーで得たこと

園部美和子(介護者サポート NPO スタッフ)

家族が抱える問題の一つに「介護」が加わった時、家族にはどのような変化があらわれるだろうか。それは、ある日ある時の小さなアレっ？から始まる。要介護者ではなく、介護をする家族をサポートする現場で様々な悩みを聴いていると、介護は家族の問題であることが分かる。年に 2 回、社会福祉研究所主催の家族コミュニケーションセミナーが行われている。このセミナーに参加し、講義と FIT や家族造形法のワーク、事例検討を通して、介護を家族の視点から考えることができた。

肩書をなくした父を独り占め…うまいなあと思った介護川柳である。たったこれだけの文字から、この家族の多くを想像してしまう。

有名大学を卒業後、結婚し、二人の子供をもうけた。折しも、時代はバブルの真っ只中。平日は深夜まで接待、土日はゴルフ、たまに家にいるとテレビの前でトド状態。母の愚痴を一身に受けた娘もすっかり成長し、就職をする。娘は出世した父の、社会という荒波でのサーフィンの腕も認めざるを得ない。反目しあった息子もそれなりに育ち、子供たちの巣立ちを迎える。そして子供たちの結婚。家族のライフサイクルは巡る。

父の実家、母の実家の困難な介護や、娘・息子の子育ての手助けなど、家族で問題を乗り越えてきた。長い年月の後、病院の待合室で車いすの父に寄り添う娘。

「父は幸せだったのだろうか。そしてその父の娘で、私は幸せだったのだろうか。私たち家族の中で自分流を崩さなかった母。結局、今日もお稽古に行ってしまった。あの人の強いパワーで、振り回されたけれど、私が家族の中でやってきたこと、あれは母がやることだったのかもしれない。私は妻の役割や母の役割をしていたんじゃないかしら。父はいつも気持ちが外に向いていて、変化にとんだ時間を過ごしているのかと思っていたけど、家族みんなが色んなことで変わっていったのに、父だけが変わらなかったのかもしれない。

私と兄は向き合っていたと確信していたのに、結婚してから変わっちゃったなあ。介護は私ばかり。本当に不公平だ。おまけに何で、相続のことなんか言い出したのだろう。いくら、お義姉さんの実家に問題が多いと言ってもあんまりだ。そういえば、母の育った家だって、問題多い。

隣のおばさんは私のこと、介護中なのに本当に綺麗になさって、だって。介護してる人は、憂鬱そうで、うなだれていて、不安そうで、助けてというオーラを出していなければいけないのかしら。ま、そういう言葉しか持ち合わせないのね。彼女と私は、そういう関係だから。そうか、私も父のこと、介護されてる人はこうあるべきって思っていたかも。母のことも、兄のことも。そうじゃなくって、違う形容詞もあるかもね。取り敢えず、今は、父に寄り添おう。同じ世界を生きてみよう。

もう 2 時間も待たされている。無駄な時間。じゃなくって、こんなことを考えられた貴重な時間と考えるか。そうそう、父を独り占めって考えよう」

以上が私の妄想です。セミナーに参加する前の私の妄想は、多分「父は、不幸せだった。その父の娘で損だった。介護は私の生活をすっかり変えた。子育てと仕事と介護など両立できるわけがない。私は適度な教養もあるし…私は…だし、それに私は…だし…私は、私は、だから、私は父の残してくれた物全部を独りで受け取ってもいいはずだ…肩書をなくした父の財産を独り占め」だったことでしょ。

③ 第 20 回家族援助技術セミナー報告

解決を構築する技法

深田耕一郎（社会福祉研究所研究員）

2012 年 9 月 15 日に第 20 回家族援助技術セミナーが開催された。テーマは「スーパービジョン・連携のための解決構築アプローチ」というもので、講師は安達映子特任研究員だった。当日は地域包括支援センターのケアマネージャー、高齢者ショートステイの管理者、児童相談所の相談員、スクールカウンセラー等の対人援助職者の参加があり、私も在宅障害者介護に携わる援助者の 1 人として受講した。

セミナーは安達先生の「**解決構築アプローチ Solution Building Approach=SBA**」に関するレクチャーからはじまった。これはアメリカの心理学者インスー・キム・バーグらが考案した援助技法で、当事者と援助者が協働で問題の解決を構築するという点に特徴がある。**解決構築アプローチ**は対概念である**問題解決アプローチ**と比較するとわかりやすい。**問題解決アプローチ**とは、ある症状の問題点を調べ、その原因を特定し、治療を施していく療法である。悪いところを「治す」という点で医療的なアプローチに親和的だ。

他方、**解決構築アプローチ**は問題の原因を追究せず、未来の解決像を当事者と援助者が語り合いながら構築していく。たとえば、ある生活困難を抱えた家族がいたとしよう。しかし、その家族は「放っておいてくれ、干渉するな」と援助を拒もうとする。これに対して**解決構築アプローチ**は「〇〇さんのことについて、家族こそが責任をもちたいと考えていらっしゃるのですね」、「ご家族の方針や事情に立ち入れたくないというのは当然のことです」「(しかしながら、私たちは△△のことを心配していますので) ご家族のやり方について教えていただけますか」という語り方をする。この療法は当事者の状況をねぎらい、認めることから始まる。次に本人が解決の手がかりを見つけられるように質問を投げかける。そして「ゴール」を明確にし具体化する。**問題解決アプローチ**が医療モデルだとすれば、当事者と援助者が協働で語りを紡いでいく**解決構築アプローチ**はナラティブモデル、あるいは当事者の関係性に注目する点で関係モデルといえるかもしれない。

後半は前半の講義をふまえてロールプレイ中心の演習になった。私はクライアントの立場にたって自分が日ごろ抱えている、研究と実践を両立させることの難しさについて話した。セミナー受講者が相談者役になって私に質問を投げかけてくれた。「どのような点が難しいですか」「それに対してどんな工夫をしていますか」等々。私が普段やっていることをぼそぼそと話すと「その工夫はよく考えられましたね」と返事をもらった。会話が収束するころ「いまの満足度を数字にするといくらでしょう」と聞かれた。私は「7か8です」と答えた。相談者と私は顔を見合わせて「なんだ、じゃあそんなに悩んではいないのですね!」とあって笑った。ぼんやり抱えていたものが意識化されて自分でも意外な感じだった。最終的に「いまのままで十分だからそのままでもいいと思いますよ」「何か変化のきっかけがあればまたそのときに考えましょう」と言葉もらった。これは**解決構築アプローチ**の中心哲学、「うまくいっていることを続ける。うまくいかないなら、できることから変えていく」を表現したものだ。こういわれて私はずいぶん気持ちが楽になった。「解決を構築する」という援助技法の醍醐味に触れたセミナーだった。

さて、安達映子先生に担当いただく家族援助技術セミナーは今年度が最後になる。社会福祉研究所の屋台骨である当セミナーを支えてくださった功績はとても大きい。心よりお礼申し上げます。

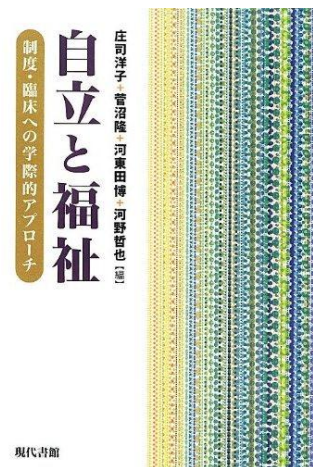
《新着図書》

『自立と福祉—制度・臨床への学際的アプローチ』（庄司洋子・菅沼隆・河東田博・河野哲也編、現代書館）の出版

社会福祉研究所が取り組んできた、共同研究「自立と福祉をめぐる制度・臨床への学際的アプローチ」の成果を出版いたしました。

このアンソロジーでは、自立とは何であり、自立が人間にとって価値を持つものであるのなら、それをどのように達成すべきかについて、さまざまな分野と角度から論じています。本書は、自立において追求されている当事者のニーズを受け継ぎながらも、さらに従来の定義を超えた新しい自立概念を社会福祉領域において構築しようという意図を持っています。

どうぞご一読ください。



2300 円 + 税 A5 判並製 384 頁
ISBN : 978-4-7684-3521-2

I. 自立概念の再検討：

「自立をめぐる哲学」河野哲也／「自立とケアの社会学」庄司洋子

II. 障害と自立の制度的考察：

「デンマークにおけるハンディキャップを有する者への就労『支援』と就労能力評価方法」菅沼隆／「障害者の自立を支える所得保障」百瀬優／「パーソナルアシスタンス制度にみる自立」河東田博／「日本の生活保護・障害年金と障害者」田中聡一郎・百瀬優／「日本の精神保健福祉施策と自立」酒本知美

III. 障害と自立の臨床的考察：

「入院経験者の語りにみる精神科病院と自立」松原玲子／「障害者の自立生活と介助」深田耕一郎／「組織運営への知的障害当事者の参画と自立」河東田博／「リハビリテーションにおける自立」佐川佳南枝

IV. 自立をめぐる福祉社会学的考察：

「スウェーデンにおける家族政策と女性」浅井亜希／「妊娠・出産過程にみる女性の自立」菅野摂子／「女性の就労と自立の関係」杉浦浩美／「高齢期の自立と地域」新田雅子／「医療における患者の自立」松繁卓哉／「『地域貢献住宅』の可能性」野呂芳明／「貧困に晒される人々の健康問題から『自立支援』を問う」湯澤直美

V. 考察とまとめ 河野哲也

なお、本書は 2013 年度前期全学共通カリキュラム主題別 B 科目「自立と福祉—福祉社会を構想するために」の中でテキストとして使われ、各執筆者が交代で講師を務めることになっています。

本書が書店に並ぶだけでなく、意見交換の素材として、また、啓蒙の書として広く使われ、一人ひとりの幸福の実現のために役立っていくことを期待しています。

《2012 年度後期 活動報告》

【社会福祉のフロンティア】

第 35 回

テーマ：グローバル化に向き合うデンマーク福祉国家と労働組合
—デンマーク労使関係の伝統といま

日 時：2012 年 12 月 21 日（金）18：30～20：30

場 所：池袋キャンパス 14 号館 5 階 D501 教室

講 師：菅沼 隆（立教大学経済学部教授、社会福祉研究所所員）

【各種セミナー】

第 2 回 家族コミュニケーションセミナー

テーマ：日頃の家族関係を振り返り、新たなコミュニケーションのあり方を見つけましょう
—家族イメージ法（FIT）を用いて

日 時：2012 年 10 月 6 日（土）10：00～16：00

場 所：池袋キャンパス ミッチェル館 1 階 セミナー室

講 師：河東田誠子（社会福祉研究所特任研究員）

第 2 回 家族援助に関する研究会

テーマ：研究会を通して対人援助に関わる人たちが、直接の援助対象者やそれに関わる家族成員
および家族関係のあり方に対する理解を深め、より適切な援助のあり方について検討す
る。

日 時：2012 年 10 月 27 日（土）13：00～16：00

場 所：池袋キャンパス ミッチェル館セミナー室

講 師：河東田誠子（社会福祉研究所特任研究員）

【ジェンダー・ファミリー研究会（GF 研）】

第 4 回：現代の父子家庭問題

日 時：2012 年 9 月 19 日（水）18：30～20：00

講 師：重川治樹氏（元毎日新聞社記者、フェリス女学院大学非常勤講師）

場 所：以下、いずれも池袋キャンパス 5 号館 2 階 5202 教室

第 5 回：介護の社会化と家族のかたち—障害者の自立生活へのフィールドワークを通して

日 時：2012 年 10 月 17 日（水）18：30～20：00

担当者：深田耕一郎（社会福祉研究所研究員）

第 6 回：遠距離介護を取り巻くお金

日 時：2012 年 11 月 21 日（水）18：30～～20：00

担当者：太田差恵子氏（離れて暮らす親のケアを考える会「パオッコ」理事長）

（第 7 回 打ち合わせ 2012 年 12 月 19 日）

第 8 回：スウェーデンにおける家族政策と女性の自立

日 時：2013 年 1 月 23 日（水）18：30～～20：00

担当者：浅井亜希（立教大学法学研究科博士後期課程・社会福祉研究所研究員）

第 9 回：日本のブックスタートの現状と課題

日 時：2013 年 2 月 20 日（水）18：30～～20：00

担当者：星野裕美氏（立教大学 21 世紀社会デザイン研究科博士前期課程）

第 10 回：ひとり暮らしの在宅医療・ケアの現状と平穏死

日 時：2013 年 3 月 27 日（水）18：30～～20：00

担当者：富田眞紀子氏（立教大学 21 世紀社会デザイン研究科博士前期課程修了生）

【研究例会】

第 3 回：当事者の語り合いから生まれる「自画像」—支配的文化の理性に対する批判

日 時：2012 年 11 月 20 日（火）18：30～20：30

場 所：池袋キャンパス 12 号館 地下 1 階 第 4 会議室

担当者：鈴木隆雄（千葉大学人文社会科学研究科博士課程・社会福祉研究所研究員）

第 4 回：SFR 自由プロジェクト研究報告会

日 時：2013 年 1 月 26 日（土）13：00～16：00

場 所：池袋キャンパス 12 号館 2 階会議室

担当者：研究分担者

発行：立教大学社会福祉研究所
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel：03-3985-2663
Fax：03-3985-0279
e-mail：r-fukushi@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ISW/